(口絵解説)

花の病害虫(18) ――ベゴニア――

^^^^

日本では、シュウカイドウというより、ベゴニアの名で親しまれている植物であり、花壇や鉢花としてよく栽培されている。シュウカイドウ科 (Begoniaceae) はこれまでに約900種が知られており、シュウカイドウ属 (Begonia)、ヒルブランディア属 (Hillebrandia)、シンベゴニア属 (Symbegonia)、ベゴニエラ属 (Begoniella)、セミベゴニエラ属 (Semibegoniella) の5属からなる。しかし、シュウカイドウ属が主な属であり、他の4属は1属1種から数種の小さな属である。

花の美しさを主に楽しむ種類として、球根ベゴニア、ベゴニア・センパフローレンス、ベゴニア・エラチオールがあり、葉型や葉紋を主に観賞する種類として木立性ベゴニア、葉ベゴニア(レックス・ベゴニアともいう)、シュウカイドウが栽培されている。

病害としてはウイルス病、斑点細菌病、灰色かび病、 茎腐病、さび病、白星病、炭そ病、うどんこ病、葉枯線 虫病、茎線虫病、根腐線虫病、根こぶ線虫病などが知ら れているが、栽培上問題となっている病害は斑点細菌 病、茎腐病、さび病、うどんこ病などである。

1 斑点細菌病

本病は Xanthomonas campestris pv. begoniae によって生じ、栽培されているほとんどのベゴニア類に発生するが、エラチオール種で被害が大きい傾向がある。病原菌は好気性で、大きさ $1.0\sim2.0\times0.5\sim0.6~\mu m$ のグラム陰性、桿状細菌で、単極 1 本の鞭毛を有し、スライムや黄色色素を産生する。

初め葉縁や葉身に水浸状の小斑点を生じ、これは葉脈に沿って拡大し,葉脈間に囲まれた褐色の病斑となる。 病斑部は黄色の鮮明なハローを伴い,裏面には菌泥の噴 出がみられる。病勢が激しい場合には病徴は葉身から葉 柄に進展し、やがて株全体が腐敗枯死する。病勢が軽い 場合には病徴は斑点で停止するが,病原細菌が維管束内 部に残存するため,挿し木繁殖する場合は,次年度の重 要な伝染源となる。

第一次伝染は、用土、ベンチ、鉢、穂木などによって 容易に行われる。また、発病株からは灌水や接触によっ て次々と伝染する。このため、本病が一度発生すると、 毎年発生するようになり、完全に防除することは難し い。 防除は発病が認められない温室から穂木を導入し、病原菌を温室に持ち込まないことが最も重要である。発病が見られた場合には、病葉をよく取り除き、通風をよくするとともに薬剤を散布する。薬剤としてはストレプトマイシン・銅水和剤、オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン(アグリマイシン100)水和剤、ポリカーバメート水和剤などが有効との試験例がある。

2 茎腐病

本病は Rhizoctonia solani によって生じ, ほとんどの ベゴニアに発生するが, 木立性ベゴニアに発生すると被 害が大きい傾向がある。病原菌は不完全菌類に属し, 通常, 胞子は作らず, 菌糸と菌核で繁殖する。完全世代は 担子菌類の Thanatephorus cucumeris である。きわめて 多犯性の菌であり, 多くの植物に病原性を示す。

初め地上部の茎に黒〜黒褐色のややくぼんだ病斑を生ずるが、これはやがて拡大し茎を取り巻くように、乾腐状に表皮から内部に向かって腐敗する。このため、発病株は病斑部から折れやすくなる。また、葉や茎の分岐部に発生すると落葉や落花しやすくなる。

第一次伝染は用土, 穂木などによって容易に行われる ため, 発病園では毎年決まって発生する。しかし, 発病 株からの伝染はほとんど行われない。

防除は無病穂を用いることは当然であるが、発病した場合、発病茎を病斑部の2~3cm上部から切り取り、その切り口にベノミル剤ペーストを塗布すると、ほとんどの場合病徴の進展は停止する。

3 さび病

本病は Pucciniastrun boehmeriae によって生じ、エラチオール種にのみ 5~7 月に発生する。病原菌は担子菌類の層生さび菌科に属し、ベゴニアの葉の裏面に夏胞子を形成する。

初め葉の表面に水浸状の赤褐色の小斑点を生ずるが, これは輪紋を描いて拡大し、黄色のハローを伴ったやや くぼんだ円形褐色の病斑となる。やがて,病葉の裏面に は赤褐色の夏胞子を多数形成する。病勢が軽い場合には 円形の斑点で病徴は停止するが,病勢が激しい場合には 病斑同士が融合し,病斑が葉全体を覆うようになると落 葉するか枯死する。

本菌はイラクサ科カラムシ属のコアカソを中間宿主としてベゴニアに伝染するため, 山沿いや山上げ栽培などで発生する。

(栃木県農業試験場 木嶋利男)